

# 1 武士の儒教的エートスと近代化

笠 谷 和 比 古

## [はじめに]

本報告では、日本社会において長い時代に亘って支配的地位を占め、19世紀の近代化の過程においても重要な役割を演じることとなった固有の社会階層である武士に焦点を合わせ、彼らが身につけていた儒教の性格はどのようなものであり、それが日本社会の近代化に対してどのような意義を有していたかを分析する。ここではこの問題は、儒教化された武士のあり方と、武士化された儒教のあり方との、その双方向の観点から分析されることとなるであろう。

## 一、武士の存在形態とそのエートス

報告では儒教の問題に入る前に、武士の思想ないしエートス一般がどのような性格のものであったかを、武士の存在形態との関連において検討しておきたい。

武士は10～12世紀のころに日本社会に登場してきた独自の戦士身分の者（およびその集団）であり、それは騎馬・弓射の武技を家職として代々にわたって継承していくような専門の戦士であった。

他方、武士はまた土地領主（「<sup>ザイチリョウシユ</sup>在地領主」）としてあり、自己の領地（「<sup>ジョリョウ</sup>所領」）を開発し、農民を使役するとともに用水灌漑の設備を敷設し、農業生産の諸条件を整備していくような生産の組織者としてあつた①。

このような武士の存在形態の二面性の問題を思想ないし武士のエートスの観点から見たときには、次のようになるであろう。

前者の専門戦士としてのそれは「兵ツワモノの道」「弓矢取る身の習い」などと呼ばれるもので、のちに「武士道」として確立されていくものである。それは武士の行動規範にして名誉の掟であり、戦いの場、危難な状況の下における敢闘精神、能動性、主体性、自立性などの性格によって特徴づけられるものである。

これに対して後者は、土地と人民を支配し、領地の安定した経営を行動目標とする治者としての心構えを養うもので、当時の観念としては武士＝在地領主の「<sup>イク</sup>家」の永続と発展に対する意欲という形で表現されていた。

## 二、武士のエートスと儒教の受容

日本社会の武士は、一つには戦士としての名誉を重んじる勇猛の精神を、いま一つには所領を安定的に経営せんとする治者の合理的な精神という、この二つの些か相矛盾する精神を兼有していたのであるが、徳川時代に入り、儒教が社会に広く浸透するようになって、武士の思想も儒教の影響の下に変容し、成長していった。

武士の個体としての自立性の問題を、儒教の観点から考究し発展させていった者の一人は山鹿素行である。素行は山鹿流軍学の祖でもあるのだが、その武教論的儒教においては武士の理想を、大丈夫の卓爾とした独立という表現をもって論じる。それは度量（人間的な大きさ）・志気（志の高さ）・温籍（ゆとりある態度）・風度（所作振舞いの気品の高さ）という諸価値を兼ね備え、「胸中に天下の万事を容れて自由」（『山鹿語類』巻二一）であるような人格の陶冶を目指すものであった②。

他方、武士の治者としての性格は、徳川時代の戦争のない持続的な平和の状態の中で、大いに発展させられていった。日本社会の武士たちは中世以来の長い歴史の変遷の末に組織的に統

合されるに至っており、徳川時代においては武士たちは、多くの場合、いずれかの大名（藩侯）に仕え、大名家（藩）の家臣という存在形態をとっていた。将軍（幕府）に直属する家臣たちは幕臣と称せられたが、その存在形態は前者と同様であった。

大名家（藩）は本来的には、戦士としての武士たちによって組織される軍事的団体であったが、持続的平和の状態の下で、それは大名家（藩）の領地（藩領）を統治するための行政的組織としての性格を強めていき、武士はこの行政的組織の各部局に配属されて、藩領の統治に携わる官僚として位置づけられた。

17世紀の中ごろから顕著になってきた、藩領の統治に携わる治者ないし行政官というその性格は、日本の武士が儒教を受け入れる重要な基礎をなした。この時期に儒学は大いに流行し、池田光政・保科正之・徳川光圀などの「名君」と称せられた大名たちは、朱子学や陽明学を信奉してこれを大いに普及させた。

18世紀に入ると荻生徂徠の古文辞学が登場することによって、日本の儒学はその様相を一変させる。徂徠は朱子学の道德至上主義に由来する観念的性格、主観的な内省に問題を帰してしまいう態度に疑義を呈し、儒教の本来は古代の聖人の制作にかかる礼楽刑政の具体的な制度を明らかにして、治国安民の実を挙げるところにあることを主張した。

儒教をもって道德的観念論ではなく、具体的な制度を考案しつつ問題の処方を示していく実際的な政治の学、実用の学と位置づけた徂徠学は、この時代の各地の大名家（藩）において追究されていた財政改革、政治改革の気運の高まりに応えるものとして大いにもてはやされ、一世を風靡するに至った。

この後に日本社会の中で発達する実学、物産学、経世学などといった実用的で実践的かつ実証的な性格を備えた学問の多くが、この徂徠学的な思考法の枠組みの中で形成され、発展していくものである。

徂徠学をめぐるいま一つの重要な展開は、折衷学派という独自の儒学を生み出したということにある。すなわち、徂徠学の制度考証を中心とした学術的水準の高さは認めつつも、人間の道学的修養の意義を否定しかねない徂徠学のあり方に危惧を抱いた人々は、朱子学の道德性の高さを再認識するとともに、徂徠の古文辞学の精緻な実証主義的方法を用いて学問的な生産力を高めていくという折衷的な態度を取ったのである③。

これは一見はなほだ妥協的であり姑息な態度であるような印象を受けるかも知れないが、諸学の統合の方法の一つとして見るべきものがあり、古い学問秩序が支配的な世界において、新規の学問を受容したり、学問の創造的發展を実現していくうえにおいて少なからぬ力を発揮するものである。そのことは次節に見る佐久間象山の学問のあり方などの中にも認めることができるであろう。

### 三、幕末の武士の思想と日本の近代化—尊王攘夷思想を中心に—

幕末の思想、ことに武士の思想についても実に多種多様のものがあるが、ここでは幕末の政治状況の中で重要な役割を果たし、かつ社会の近代化という問題にとっては否定的な媒介項をなすであろうところの尊王攘夷思想を中心に引き上げ、武士の儒教的エートスと近代化という主題のなかで、日本の尊王攘夷思想がどのような性格を持ち、どのような機能を果たすもので

あったかを検討する。

### [水戸学]

日本幕末の尊王攘夷思想を考えるうえで逸することのできないのは、水戸藩徳川家において形成され唱導されていった水戸学（後期水戸学）である。

水戸学は藤田幽谷によって基礎が築かれてのち、これを大成したものは会沢正志斎であり、その主著は『新論』である。会沢の『新論』は「国体」「形勢」「虜情」「守禦」「長計」の五論七篇から成り、尊王敬幕、華夷内外の弁をもって二つの柱となし、これを以て水戸学の本領たる大義名分論を展開するのである。

『新論』が記されたのは文政8年（1825）であって、中国のアヘン戦争に先立つこと約20年のことであるが、会沢は同書で、「今、西荒の蛮夷、脛足の賤を以て四海に奔走し、諸国を蹂躪し、眇視跋履、敢へて上国を凌駕せんと欲す」という認識の下に対外問題を取り扱い、西洋列強のアジア進出と領土的野心についての危険性を警告するとともに、「虜の長技」たる巨艦・大砲に対抗すべく、彼よりその技術を採用入れて日本国内でこれらを建造し、また海軍を組織し水兵を訓練してこれに備えるべきことを唱えた。

『新論』は次第に普及して、水戸藩のみならず全国の尊王攘夷派の人々から經典の如く崇められ、会沢は尊王攘夷運動の理論的指導者として世に迎えられたのである。

大義名分論の観点に立って、尊王攘夷の些かもゆるがせにすべからざることを説いた同書であるが、しかしながら留意すべきことに、そこには次のような一節も含まれている。

「天地は活物なり、人もまた活物なり。活物を以てして活物の間に行ふ。その変は勝てて窮むべからず。事は時を逐ひて転じ、磯は瞬息に在り（中略）故に一たびこれを口に発すれば、すなはち空言となり、一たびこれを書に筆すれば、すなはち死論となる」（「長計」）と。

すなわち尊王攘夷は根本原則であるにしてもなお、理論でもって活きた現実を縛ることはできないとする立場であり、会沢にあっては理論への固執、理論的に首尾一貫した認識よりも、活きた現実そのものの直観的把握、そしてそれに基づく現実への実践的対応の方がより重要であると考えていたのである④。

彼は極めて原則主義的な議論を『新論』で展開したのであるが、彼自身は理論の自縛からは自由であった。彼はその後、尊王攘夷運動の嵐の吹き荒れていた文久2年（1862）に至り、世間の犬吠に抗するように「時務策」を著して開国政策を説き、これを将軍後見職の一橋慶喜に建議したのである。

### [佐久間象山]

松代藩真田家の家臣であった佐久間象山は、幕末の日本にあって外国事情に通暁した開明派の代表と見なされている。しかしその象山も始めは鎖国攘夷主義者であった。象山がオランダ語を学習し、西洋原書を通して西洋砲術の研究に携わるようになった契機は、中国におけるアヘン戦争であった。欧米列強のアジア進出に対して、いかにして国防を達成しうるかとするのが象山の課題であり、しかもそれを観念的攘夷論としてではなく、欧米の圧倒的な軍事力に対



抗しうる実力を備えるために、積極的に欧米の軍事技術、西洋砲術を学習すべきであると説き、そしてそれを実行していく開明性に象山の面目があった。

象山はもと朱子学者であり、のち西洋軍事学の第一人者と目されるようになったが、それであっても象山は朱子学を捨てることはなかった。また西洋砲術を学ぶ門人に対しても、必ず併せて朱子学の修得を義務づけていた。

この態度が彼の有名なテーゼである「東洋道德、西洋芸術」として表現されるものである。この場合、西洋芸術とは西洋の数学、物理学、そしてそれらを踏まえた大砲や蒸気船を建造する技術の学の総称に他ならないが、象山にあってはこれら西洋の自然科学の学問は朱子学に言う格物致知（窮理）の営為に相当するものであり、従前の儒学的議論に代替しうるものとするのである。象山はこれについて、「窮理も唐流の空理は何の用にも相立ち申さず、西洋實際の窮理ならでは役に立ち申さず候」（依田源之丞宛書状）、また「西洋実測の学を以て、大学格致の功を補ひ候事」（小林柔介宛書状）と、自己の見解を述べている⑤。

このようにして象山にあっては、儒学的な徳義人倫の観点と、西洋自然科学の学問とを統合するのであり、かくすることで西洋自然科学の学問を日本の学問風土の中に抵抗なく受容するとともに、それによって儒学そのものを革新していくのである。これすなわち、先述の折衷学の学問統合の方法の応用に他ならないであろう。

佐久間象山について更に考慮すべきことは、一つには、このような象山的な人間類型はいかにして形成されたかということであり、いま一つには、このような象山は社会において孤立していたか、それとも他の人物や社会的勢力との間に有機的な連係を保持していたかということである。

前者の問題については、もとより象山個人の才能と努力の程は評価されなければならないが、しかし彼が西洋の学術を研究しようと思いついたときに、オランダ語を学習し、原書から直接に西洋の学術を学習できるという条件は、彼に先だって準備されていた事実思いを致さなければならないであろう。あるいはまた西洋の地理と国情についての知識もまた、彼の前に既に用意されていたのであり、彼は倦むことなき努力をもってそれらを吸収していけばよかったのである。

そのように考えるならば、19世紀の対外危機に先立つ、18世紀の近代化の準備期間の重要性が再認識される筈である。その時代の蘭学の発達とオランダ語原書の解読法の確立は言うまでもなく、儒学の方面でも祖徠学に発する実学的志向と実証主義な事物認識の方法、またその展開としての古方派医学の香川修徳などにおける、古典の権威ある言説よりも自らの手掛ける親試実験にあくまで信を置く態度、そして新規の学術を受容し統合していく独自の様式としての折衷学的な思考法、それらの学問的財産が象山に継承され、象山的な人間類型を生み出しているのである。

後者の、象山は孤立していたかという問題を考えてみよう。これは明白に否であろう。象山は川路聖謨、勝海舟という開国通商政策を志向する進歩的人物たちと深いつながりを有するのみならず、尊王攘夷を呼号する勢力に対しても強い影響力を及ぼしていた。そもそも先述の水戸学の会沢正志斎の『新論』においても、夷狄に対処するために大砲・巨艦を建造すべき

ことを唱えていたが、それら夷狄の「長技」については、これを夷国から学び取るということについては会沢らも当然視していたのである。

それ故に象山はその思想的同調者を多数見出すだけではなく、日本の尊王攘夷運動のそのものの性格を象山的な方向で規定することにもなったのである。そしてこの問題は、象山の愛弟子であった吉田松陰を通して現実的な形で示されていくのである。

### 〔吉田松陰〕

長州藩毛利家の家臣であった吉田松陰は、尊王攘夷思想の最も有名な代表者として知られており、その運動の指導者としても卓越した存在として理解されている。吉田松陰は、戦前・戦中の時代において、天皇制ナショナリズムの狂信的な信奉者たちによって神格化して取り扱われ、その思想もそのようなものとして受け止められてきた。

アメリカを指して「墨夷」と称し、アメリカ艦隊長官ペリーとの間に締結された日米和親条約を非難し、続く通商条約の締結交渉に対しても激しくその不可を唱え、他方では天皇の神聖性に対して信仰に近い感情を抱き、幕府が天皇の勅許を得ぬままに条約調印したことをもって売国的行為と見なした松陰の言動は、たしかにその側面だけを取り上げるならば、かれを真性の尊王攘夷主義者と位置づけるに充分足るように思われる。

しかしながらその海防・外交論を詳しく検討するならば、その激しい攘夷的な印象とは裏腹に、彼の真意は開国策にあり、諸外国との和親・通商の実現にあったことを知る⑥。

松陰が偏狭な排外主義者でなかったことは、安政元年（1854）の日本に來航していたペリー艦隊に同行して欧米諸国に渡り、広く海外を見分・学習しようとした態度から充分に窺われるのであるが、それはさらに彼が残した海防・外交に関する一連の論策の中に見て取ることができる。

彼の死の一年前にして、日米修好通商条約の締結の是非をめぐる議論が日本国中で沸き立っていた安政5（1858）年4月に記された「対策一道」の議論は注目に値するものである。

「貴賤を問はず、推薦拔擢して軍帥・船司となし、大艦を打造して船軍を習練し、東北にしては蝦夷・唐大<sup>カラフト</sup>、西南にしては琉球・対馬、憧々往来して虚日あることなく、通漕捕鯨以て操舟を習ひ海勢をさと、しかるのち往いて朝鮮・満州及び清国を問ひ、しかるのち広東・咬囉<sup>カウラ</sup>吧・喜望峯・豪斯多辣理<sup>オウストラリ</sup>、皆館を設け將士を置き、以て四方の事を探聴し、かつ互市の利をとる。この事三年を過ぎずして略ぼ弁ぜん。しかるのち往いて加里蒲爾尼亞<sup>カリホルニア</sup>を問ひ、以て前年の使に酬い、以て和親の約を締ぶ」（『戊午幽室文稿』安政5年4月中旬）と。

松陰は「国体」を失うことなかれと、しばしば強調するが、しかし、それは偏狭な排外主義や天皇制ナショナリズムを意味するものではない。他律的に、外国の圧力に屈して開国・通商関係に引き込まれるのではなくて、国家の主体性を堅持したうえで、自らの意思と見識に基づいて諸外国と対等の立場で交際すべきことを意味したのである。

彼はまたこの点を、安政2（1855）年の作である『講孟割』の中で次のようにも述べている。「夷狄をにくむは純ら夷狄なるをにくむに非らず。中国を以てして流れて夷狄に入るを惡むなり（中略）夷の礪磧「大砲」船艦、医薬の法、天地の学、皆吾に於て用あり、宜しく採択すべ

し。其の皇国の用を成すに至りては、また夷狄にして中国に進むと云ふべし」（「藤文公上」第四章）と。

松陰は鎖国主義者でも、排外主義者でもなかった。松陰は、寧ろこれらの考えを世界の大勢を把握できない、偏狹で誤った考えであると明確に断言していた。さらに注目すべきことには、鎖国攘夷を強硬に主張していた孝明天皇と保守的な宮廷勢力に向かって、言葉厳しく、その時代錯誤の迷妄であることを直言もしていたのである。

松陰は疑いの余地の無い尊王主義者であったが、だからとて天皇の意命に無批判に随順することをもって尊王の所以であるとは毛頭考えていなかった。天皇の考えに誤りがあったならば、死を賭してもこれを諫める諫争の精神を堅持するのが忠臣のあるべき姿、武士の道であるとする考えの持ち主であった。松陰は天皇に向かって諫言するに、鎖国主義・排外主義に固執することの誤りを述べ、航海互市をもって国を興隆させる開明政策を採用すべきことを説くのであった。

すなわち偏狹な鎖国主義は時代遅れの迷妄として侮られることになるであろうこと、それは通商条約の締結を進めようとしている幕府の役人たちの主張であるだけでなく、「当今、天下材臣智士と称する者」は皆、そのような見解に立っているのである。朝廷があくまで鎖国攘夷の立場に固執するならば、天下の有為の人材は朝廷を見限って幕府の側についてしまうことであろう。それ故に、「鎖国的一条は、深く時勢御察観なされ、御変革これなくては、皇国御興復はとても出来申さず」、あるいは「外国の事情を知らずして、徒らに海岸を守り、貧窮に困しみ候は誠に失策」と切言するのであった（『戊午幽室文稿』所収「愚論」「続愚論」）。

松陰が、欧米人そのものを野蛮人と見做して侮蔑していたとか、それとの交際を拒否しようとしていたということも、決してない。松陰はアメリカの事情を研究しているうちに、同国で行われている禁酒禁煙運動のことを知った。すなわち酒・煙草の有害無益であることの理を究め、禁酒禁煙の会を創設して同志を募って名簿に登録し、その運動を広げていくというのである。

松陰曰く、「人の難きものは、欲を寡くするより甚しきものなし。墨夷はすなわち之れに克つものあり。むべなるかな、其の国日に増々隆興し、遂に吾が上国を凌慢するに至ること」（『戊午幽室文稿』安政5年5月5日付）と。

松陰は、アメリカの日本に対する強圧的な砲艦外交を憤ってはいるが、アメリカ人そのものについては、その道德性の高さ、克己の精神の優れていることを素直に讃えている。そして、そのような国民個々人の克己の精神の高さが、ひいては国家の興隆に結び付いている有様を、一つの教訓として受け止めているのである。ここにはアメリカ人とアメリカ社会の優秀性に対する賛嘆の念こそあれ、人種的な偏見に属する迷妄などは、いささかも認めることはできないのである。

欧米諸国を野蛮国ではなく文明国であると率直に認めているからこそ、かれはアメリカへの密航を企てたのである。そのように松陰ほど、諸外国に対して偏見を抱くことなく、機会があればその地に赴き、それを実地に観察し学習し、見聞を広めることがいかに人材の育成にとって重要であるか、また自国の発展にとって不可欠なことであるかを認識していた人間はいない

であろう。

松陰曰く、「一国に居付き候と天下に跋涉仕るとは、人の智愚勞逸、近く日本内にてても懸絶致し候事、況や四海に於てをや」（「統愚論」）と。ここには若い折りに、日本各地を遊学し、各地の名士・論客と交わり、地方の社会と政治の実情を目の当りに観察した経験が、いかに貴重な財産となって自己の錬磨に資したものであるかを思い巡らす松陰の実感が込められている。そして松陰にとって、その思いはいささかの偏見を蒙ることなく、すなおに海の外の世界に向かって拡大していくこととなるのである。

この後、松陰は安政の大獄によって刑死することとなるが、彼の弟子たちは師の教えに忠実に行動することとなる。松陰の死より4年後の文久3年（1863）は日本において攘夷運動の嵐が最も強く吹き荒れた時代であったが、それにも拘らず敢えてその時期に、かれら自身も攘夷党であり、松陰の薫陶を受けた伊藤俊輔（後の明治政府の総理大臣伊藤博文）・井上聞多（同じく外務大臣井上馨）ら5名は欧米の先進技術を学ぶべくイギリスへの密航を企て、断髪し、「胡冠をかぶり、胡服を着す」という夷人の姿に身をやつしてイギリス商船でロンドンに向かうのであった⑦。そしてロンドンでの勉学を通して西洋文明を修得していくのであるが、かれらが攘夷の不可を悟り、文明開化の主唱者となるのに、殆ど時間はかからなかったと言ってよいであろう。

松陰はまたこの問題に関連して、「公卿より列侯以下、万国航海仕り、智見を開き、富国强兵の大策相立ち候様仕りたき事に御座候」（「統愚論」）とも述べ、公卿・大名クラスの国家の中枢に位置すべき人物もまた、みずから世界各国を視察すべきことを説いていたが、これ実に、明治政府下の明治4～6年（1871～73）、右大臣岩倉具視を長となし政府要人の多数を率いて欧米各国を巡覧し、日本の近代化政策遂行のうで画期的な意義を有することとなった、いわゆる岩倉遣外使節として実現することとなるのであり、その先駆的な提言であると見ることができるであろう。

## 〔結 論〕

以上のようなものが、日本の尊王攘夷の姿、しかもその最も有力な勢力の実情であった。その特性を纏めるならば、以下になるであろう。

### 一、日本の尊王攘夷運動の現実主義的性格

日本の幕末に展開された尊王攘夷運動は著しく現実主義的な性格を有していたと規定できる。そもそも日本における尊王攘夷の主張には、攘夷と対外戦争の危機を呼号することによって、太平の眠りを覚まし、武士の精神の回復をはかり、国内体制を引き締めて、富国强兵を実現していく手段とするという冷徹な政略の要素のあったことが指摘されているが⑧、それを別にして、日本の尊王攘夷主義を純粹に思想の問題として捉えた場合にも、その現実主義的性格は顕著である。

そして、その現実主義というものの内容は以下の幾つかに類別されていくであろう。

第一は、活きた現実そのものを重視する立場である。すなわち理論的な首尾一貫性よりも、活きた現実そのものの直観的把握と実践的対応の成否を重んじる姿勢である。会沢に見られた

ような「機は瞬息にあり」とする臨機の決断、理論的言説に縛られない自在の行動を重視する態度は、明らかに戦場の転変極まりない不可測の状況の中での決断と実行を重視する武士の行動特性、あるいは兵学的思考法に由来するものである。

これは従前の言説に捉われず、情勢の推移にともなう行動の自由な展開を可能にするものであり、日本の攘夷運動が極めて激しい高揚を示すにも拘らず、急激に開国と欧化の方向に転換していく事情はこの点に基づくものである。

この問題は儒学的に捉えた場合、理論的な体系性よりも自己の決断と実践を重視するという点からするならば、陽明学との関連を指摘しうるかも知れない。吉田松陰の行動主義、実践的精神のバックボーンに陽明学があることは疑いなく、松陰をもって陽明学者の系列に置く考えもある程である。

さて尊攘運動の現実主義の第二の意味は、戦略的現実主義である。これは究極的価値の実現のために、敢えて権宜の措置を取るもので、儒学の「経權」論における権道を活用する立場を指す⑨。

「夷の長技を師し以て、夷を制す」(『海国図志』)とは中国の魏源の有名な言葉であるが、既に見たように、この戦略的発想は会沢正志斎・佐久間象山・吉田松陰らに共通するものであり、日本の尊攘運動の根本的な性格であった。日本の攘夷主義はそもそもからして魏源的な思考法を有しており、それ故にアヘン戦争を体験した中国の魏源の著述に接したとき、大いにその思想に共鳴し、広く日本国内に流布することになったものであろう。魏源はその著作の真の理解者を中国国内ではなくて、日本の中に見いだすことになるのである。

この戦略的現実主義の思想的背景として、儒教の権道の考え方他に、「敵を知り、己を知らば、百戦して危うからず」とする兵学的思考法が存在するのは言うまでもないことであり、この両者が合体したところに武士の儒教の面目があった。

現実主義の第三のものは、実際の効用、実証性を重視する態度である。日本には哲学的、観念的議論よりも実学を尊ぶ伝統があり、儒学においても、熊沢蕃山や荻生祖徠などを源流として治国安民の実現を第一義とする思想が隆盛を極めた。

これは道徳的無欠性や高遠な哲理の探究に価値を置く文人、文官のエートスが社会において優勢な位置を占める中国や朝鮮と異なり、戦争であれ平時の行政的行為であれ、端的に事柄の成敗と現実的效果に主要な関心を寄せる武士のエートスが支配的な日本の徳川社会に、誠に適合的な儒学のあり方であったと言えよう。

この実学的現実主義にあっては、その学問や技法の系譜や出所がどのようなものであれ、現実世界の諸目的にとって有用性や高い能力を発揮するものに対する公平な尊重の精神を養った。それ故に、大砲と軍艦という欧米の卓越した軍事技術を目の当りにしたとき、それがたとえ夷狄のものであろうとも、これを夷狄の「長技」として率直に評価する態度は自然に備わっていたし、その優れた技術およびその背後にある西洋の学問を学習しようとする志向性も、当然のごとくに湧き起こってくるのであった。

いかなる強硬な攘夷主義者といえども、夷狄と対峙するに当たって、夷狄の軍事技術を導入することに異を唱える者は幕末日本には殆ど存在しなかったと言われる所以のものであり⑩、



攘夷主義が夷狄の文化の受容、すなわち欧化主義や開明主義と無理なく両立し共存するところに、日本の攘夷運動の特異な性格があった。

現実主義の第四のものは、折衷主義的な思想統合の様式を指すものである。これはこれまで述べた各種の現実主義的な変革の動向を、伝統的な思想の体系と調和させて両立させていく思想統合の様式に関わるものであり、この統合の枠組みによって、新しい思想は轢軋を引き起こすことなく社会の中に受容されていくことができるのである。

佐久間象山における「東洋道德。西洋芸術」の考えは、道德や人倫の問題においては伝統的朱子学の立場を堅持しつつ、同時に朱子学の説く格物致知ないし窮理の局面に西洋の自然科学を中心とする学問を換入することによって、これを無理なく日本の社会に導入し、定着させることに成功しているのである。

## 二、「個」の自立の精神

日本の尊王攘夷運動に見られるいま一つの特性は、その運動に携わる武士たちの「個」としての自立性の高さという点である。そしてその自立性の高さということの内容も、以下のような幾つかの特性を有している。

第一は、この尊王攘夷運動に関わる武士たちの自我意識の強さ、使命感の高さである。佐久間象山の場合、40歳を過ぎて新たにオランダ語を学習し、西洋の原書に即して西洋文明とその学術の成果を自己の力で獲得し、西洋銃砲の製作に挑戦するのであるが、そのような彼をつき動かしているものは、その難事業をよくなしうるのは自分を差し置いて存在しないとする強い自負心と使命感であり、そしてまた「彼も人なり、我も人なり。彼の行ふ所、我に於て何ぞ行ひ得ざるの理あらんや」とする負けじ魂、不撓不屈の精神であった。

吉田松陰もまた『孟子』に依拠しつつ、「楽しむに天下を以てし、憂ふるに天下を以てす」ことを士たる者の心構えの根本となしたのであり、国禁をあえて犯して未知のアメリカへ渡航し、欧米の文化と技術を目の当りに修得しようとしたことも、また安政の大獄に倒れるまで国家の大計を考究し、人々に説論し続けたのも、偏にこの「天下を己が胸中に収める」気概と使命感に由来するものであった。

「個」の自立性の表現の第二は諫争の精神のたくましさであり、主君、上位者の命令といえども容易に服しない精神である⑪。

松陰はかねて、臣下たる者の本分は、戦陣において主君の馬前に討ち死をなすか、しからずんば平時において主君に対して「直諫極論、面折廷争」（『講孟割記』）するかの二つであるとしていた。松陰にあっては忠誠の本質は、主命に無批判に随順することではなくして、死を賭して「敢えて君心の非をただす」ことにあった。

このような松陰の諫争の精神は、藩を超えて、天皇と朝廷へと向けられていく。松陰の一連の論策は、鎖国攘夷主義に固執する孝明天皇および皇族・上級公家に向けて上呈することを念頭に置いて記された文章なのであり、しかもその時代錯誤の迷妄性を説いて止まない直言の舌鋒の鋭さには、いささかの気後れも感じられないのである。

このように主君、上位者、そして天皇に対しても、その命令や方策に誤りが見られたときには、これに異議を申し立てて再考を促し、さらに衆議を尽くしてよりよき状況を作り出してい

こうとする力が不断に作動していたのである。

「個」の自立性の第三の局面は、第一と第二のものを発展させたものである。すなわち、社会にある個々の武士がそれぞれ自律的な意思を有し、独自の判断に基づいて行動し、幕末・維新期の政治状況の中で、状況に対して主体的に関わりあい、状況そのものを革新していこうとする動向が様々な局面に見られることである。

吉田松陰は全国の名もなき武士たちが主体的な意思をもって、国家の難局に対処するために行動に移るべきことを「草莽崛起」の語をもって唱えた。それは大名家（藩）の枠組みを超える動向であり、松陰の弟子久坂玄瑞はここから「政府は先度外に打置き、各国有志の士相互に連結し、尊攘の大挙これ有たき事」という戦略を打ち出していった。

幕末・維新期の政治過程は、このような社会の末端の武士に至るまでの「個」としての自律的な行動の複合と、その多彩な展開として表現されていた。もし一連の事態が、開明的な藩主や将軍ないし天皇の英断にもっぱら基づき、波風たつことなく順調に開明的改革が進められたとするならば、そこでは外見的には近代化に成功したとしても、真に生命力をもってわがものとすることはできなかったであろう。これすなわち、武士の「個」としての自立性の意義を重視する所以のものである。

#### 【後 注】

- ① 石井進『鎌倉武士の実像』（平凡社、一九八七）、元木泰雄『武士の成立』（吉川弘文館、一九九四）、拙著『近世武家社会の政治構造』（吉川弘文館、一九九三）
- ② 相良亨『武士道』（塙書房、一九六八）一五五頁。
- ③ 衣笠安喜『近世儒学思想史の研究』（法政大学出版局、一九七六）Ⅱ第一章「折衷学派の歴史的性  
格」
- ④ 山本幸彦「後期水戸学の人々」（源了圓他編『江戸の思想家たち』下、研究社出版、  
一九七九）
- ⑤ 横手通有「佐久間象山における儒学・武士精神・洋学」（『日本思想大系』53、岩波書店）、石毛正  
「佐久間象山」（前掲『江戸の思想家たち』下）、銭国紅『アジアにおける近代思想の先駆ばー佐久間  
象山と魏源ー』（信毎書籍出版センター、一九九三）。
- ⑥ 松陰の論策および対外和親・通商の姿勢については池田論『吉田松陰』（大和書房、  
一九七三）、寺尾五郎『革命家 吉田松陰』（徳間書店、一九七三）、山崎道夫『吉田松陰（『叢書・日  
本の思想家 48』）』（明德出版社、一九七九）などを参照。
- ⑦ 文久三（一九六三）年五月十一日付、井上聞多等連名書状（『防長回天史』第三章、  
一八〇頁）
- ⑧ 井野辺茂雄『新訂維新前史の研究』（中文館、一九四二）
- ⑨ 王家驊『日中儒学の比較』（六興出版、一九八八）
- ⑩ 佐藤誠三郎『「死の跳躍」を越えてー西洋の衝撃と日本』（都市出版、一九九二）
- ⑪ 丸山真男『忠誠と反逆』（筑摩書房、一九九二）、拙著『士思想ー日本型組織・強さの構造』（日  
本経済新聞社、一九九三）